【資料】4－1

2018年度
U12カテゴリー第2回全国部会長会議
資料

2018/11/10-11

技術委員会 副委員長
ユース育成部会長・アンダーカテゴリー副部会長
山本 明

Ver.1

日本一丸

皆が一生懸命やっている

ベクトルを合わせる

さらに大きな力となる

結果に表れる

1. 育成改革の目的・目標の再確認

1. 発掘
2. 育成
3. 指導者教育
4. 大会整備
5. リーグ戦準備

ユース育成組織：
都道府県育成センター

アンダーカテゴリー部会：
都道府県リーグ戦準備
都道府県協会主催大会準備

将来のユース育成の組織体制：ユース育成組織とアンダーカテゴリー部会

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

2018 JBA

JBAユース育成・PBAユース育成組織体制

2018/7/8

2018

JBAユース育成部会

部会長：山本　明

	U12JBA			U15JBA			U18JBA			
	コーチ		ブロックユース育成マネージャー	コーチ		ブロックユース育成マネージャー	コーチ		ブロックユース育成マネージャー	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子		
北海道	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	JBA任命
・										JBA任命
九州										JBA任命

今後はU12,U14,U16となる

JBAカテゴリー別運営担当

部会長：吉田長寿

U12部会		U15部会				U18部会		
U12部会長		U15部会長				U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成M	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成M	高体連	クラブ	ユース育成M

2018

ユース育成委員会

委員長：PBAユース育成マネージャー●●●

	U12PBA			U15PBA			U18PBA			
	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子		
県	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	PBA任命
地区A										PBA任命
地区B										PBA任命
地区C										PBA任命

2018年4月または6月にPBAにてこの組織体制を開始してもらう様に要請する
事業運営担当部門は現状のユース育成組織を移行させる
今後はU12,U14,U16となる

PBAカテゴリー別運営担当

組織長：○○○

U12部会		U15部会				U18部会		
U12部会長		U15部会長				U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成M	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成M	高体連	クラブ	ユース育成M

2018年4月または6月にPBAにて上記組織体制開始を要請する
PBAにおける競技会（大会）運営等を担当する
この図では表現しきれていないが各部会内に総務・財務・広報・その他をおく予定

2018 都道府県(PBA)

将来のユース育成の組織体制：ユース育成組織とアンダーカテゴリー部会

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

2019-20 JBA

JBAユース育成・PBAユース育成組織体制（案）

2018/7/8

2019-20

JBAユースディレクター：●●

JBAユース育成

JBAユース育成部会長

	U12JBA			U14JBA			U16JBA			
	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子		
北海道	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	JBA任命
・										JBA任命
九州										JBA任命

JBAカテゴリー別運営担当

組織長：●●

U12部会		U15部会				U18部会		
U12部会長		U15部会長				U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成	高体連	クラブ	ユース育成

ユース育成と運営担当を統括する「ユースディレクター（統括）」をおく

2021

PBAユースディレクター：▲▲

PBAユース育成委員会

委員長：PBAユース育成マネージャー●●●

	U12PBA			U14PBA			U16PBA			
	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子		
県	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	○○○	△△△	□□□	PBA任命
地区A										PBA任命
地区B										PBA任命
地区C										PBA任命

PBAカテゴリー別運営担当

組織長：■■

U12部会		U15部会				U18部会		
U12部会長		U15部会長				U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成M	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成M	高体連	クラブ	ユース育成M

ユース育成と運営担当を統括する「ユースディレクター（統括）」をおく

2020-21 都道府県(PBA)

都道府県の重要性・育成普及における目指すべき成果

今後は都道府県単位での活動に重点がおかれる。

JBAは都道府県における皆様の活動を支援していく。

都道府県毎に事情が異なる。
だからこそ都道府県毎に課題解決に取り組む必要がある。

ボランティアである以上、都道府県の実情に合わせ、無理のない範囲で、
しかし、日本バスケットを成長させるために、積極的に取り組んで頂く事を望む。

育成普及における成果とは？

1．選手が将来大きく成長するための土台を作ること（育成）
2．選手がバスケットボールをすることを楽しいと思えること（育成）
3．将来の代表が世界基準で戦えるようになること（育成→強化）
4．日本のバスケットボール界が活性化していること（普及）
5．多くの選手がバスケットボールを行う様になること（普及）
6．バスケットボールに関わる方々が幸せに元気でいられること（理念）

バスケットボールで
日本を元気にします！

2. リーグ戦制度

U12/U15/U18リーグ戦制度の目的

■経緯
・ガバナンス改革：都道府県法人化、登録料徴収一元化＝登録者に試合をする権利を付与
・普及的観点：全ての登録者にゲーム環境を整備
・強化的観点：強化リーグの整備

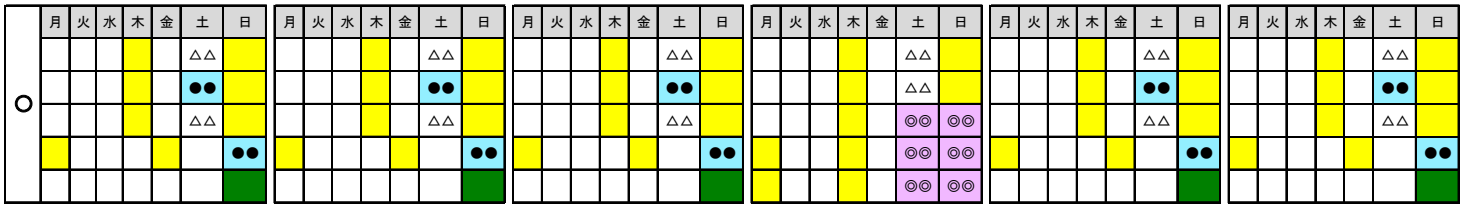
■環境変化
・クラブ・BクラブU15の登録開始
・登録移籍の課題

■目的
・試合環境を整える（普及的観点）：登録者に試合環境を整備（補欠文化解消）
・能力別のゲーム環境により拮抗したゲームを増やす（育成的観点でも成長スピード向上）
・長期リーグ戦で日常にゲームがある（練習～試合～練習のサイクル）

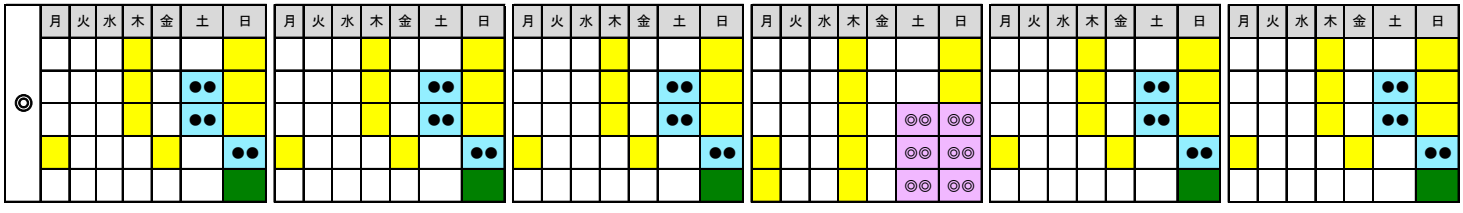
リーグ戦文化はリーグ形式でなく日常に試合をおくことが狙い

1. リーグ形式を取り入れたが，短期集中で行う例＝目指すべき文化ではない

2. リーグ戦が長期に展開され、練習～試合～練習の文化を取り入れる。育成センター事業が月に1回。トーナメント戦をはさんでリーグ戦継続。



3. リーグ戦の発展系。リーグ試合数が多くあり，練習試合をする必要もない。



- ●リーグ戦
- ◎トーナメント戦
- △練習試合
- 休日
- 育成センター実施日

1→2→3のリーグ戦文化導入→発展を目指す。県リーグ、U15/U18ブロックリーグ発展を視野に入れる。

U12リーグ戦～U12県予選の在り方（イメージ図）

県リーグ
地区A
地区B
地区C
地区D

→

U12全国県予選

日程

チームの参加規模（16/32/48/その他）

いずれも県の裁量にて決定

→

U12全国

3/28-30予定

都道府県代表48チーム

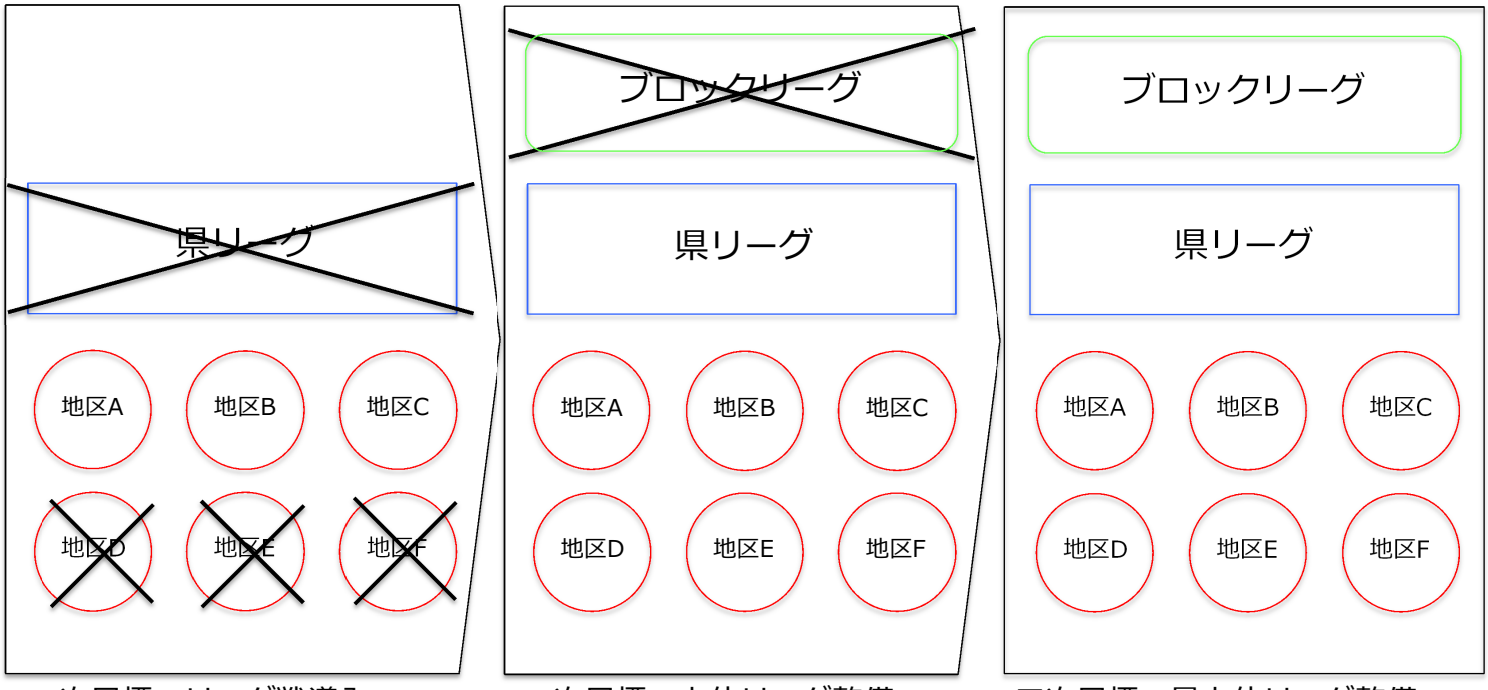
■リーグ戦の狙い（守るべき必須項目）
リーグ形式でなく、長期的に試合があることが必要
　→日常にゲームがある→ゲーム～練習～ゲームのサイクル
育成世代は試合経験をさせることが育成となる
　→育成世代には誰にも可能性があると考えるべき
拮抗した試合をするために能力別に分けるのが理想

■都道府県における県予選の在り方（守るべき必須項目）
各リーグもしくは各地区リーグ上位が県予選に出場
県予選トーナメントを戦って県代表1チームを決める
日程と参加規模を勘案して県予選形式を都道府県裁量で決定

■県におけるリーグの在り方の違い（どの在り方でも良い）
1．県リーグがない
　→　各地区リーグの上位●チームが県予選出場
2．県リーグがある
　→　県リーグ参加チーム＋2部または地区リーグ上位●チームが県予選出場

将来的にこの形を目指したい

リーグ戦導入から発展イメージ



一次目標：リーグ戦導入

2019:U15
2020:U12/U18

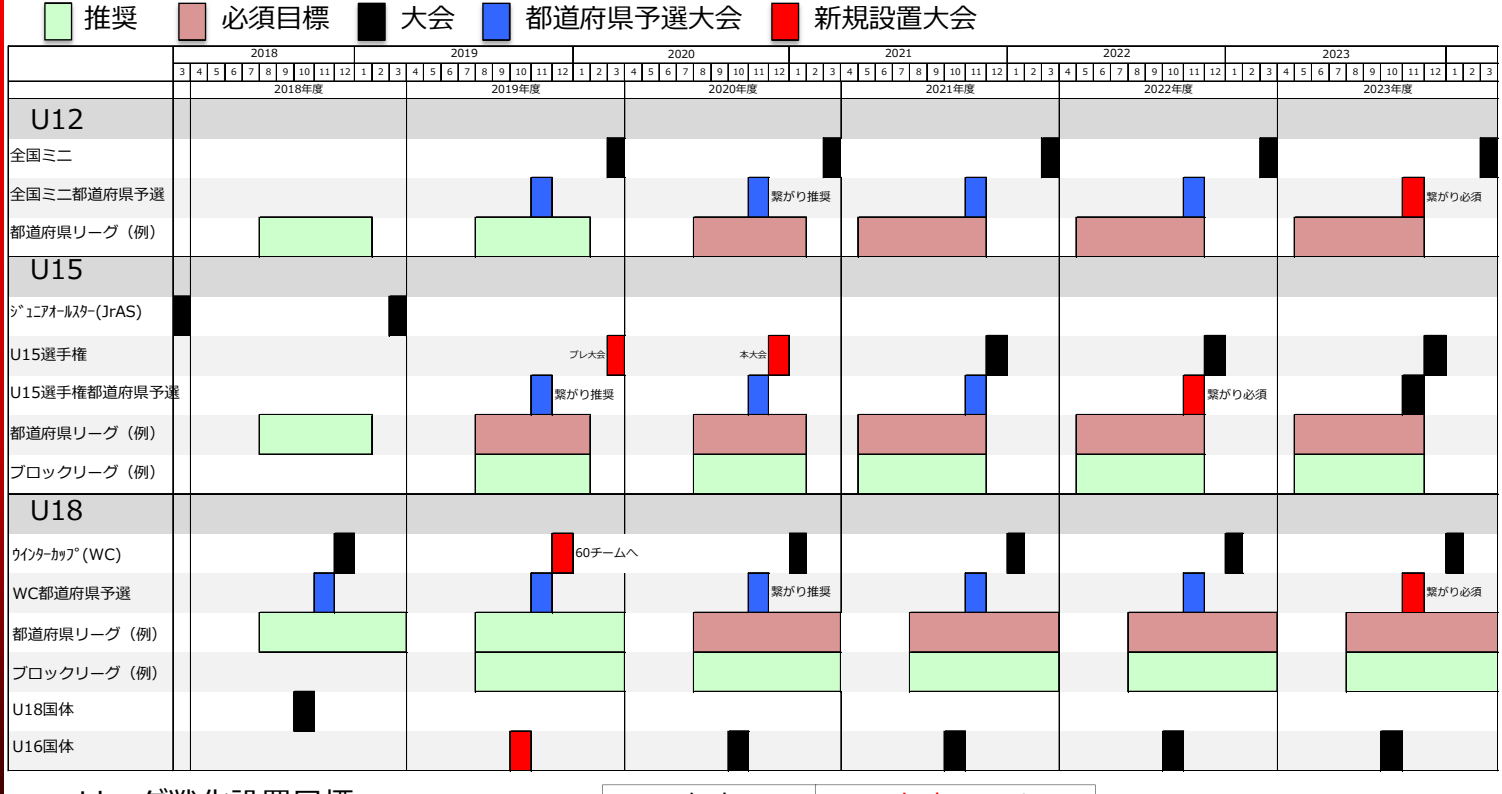
二次目標：上位リーグ整備

2022:U15
2023:U12/U18

三次目標：最上位リーグ整備

2024:U15
2025:U18

リーグ戦・県予選の関連



■リーグ戦化設置目標・・・・・・・・	2019年度 U15	2020年度 U12/U18
■県予選とリーグ戦繋がり必須目標・・	2022年度 U15	2023年度 U12/U18
■県リーグ整備目標・・・・・・・・・	2022年度 U15	2023年度 U12/U18
■ブロックリーグ整備目標・・・・・・	2024年度 U15	2025年度 U18

リーグ戦 要項（U12部分抜粋）

1. 都道府県にU12/U15/U18カテゴリー別にリーグ戦を設置する。**U12は2020年度必須化目標**
2. **全国ミニ予選と都道府県リーグ戦の繋がり**の必須化は**U12では2023年度を目標**とする
3. 当面はリーグ戦が直接的(出場校決定大会)に全国ミニ予選にならないこと
4. 試合数は**年間10試合以上**とする
5. リーグ編成の方法は都道府県の実情に合わせて決定して良い

   (①前年度成績による　②毎年リーグ編成大会を実施してリーグ編成を決定する　など)
6. リーグ開始・終了の日程は都道府県として決定して良い

   但し、オフシーズンの設置を推奨する：ゲームを設定しない期間として推奨
7. 入替戦の実施は都道府県裁量で決定して良い
8. 複数チームエントリーを認める

   「補欠をなくす」「指導者を増やす」ことを意識し、リーグ戦の目的である「登録競技者に試合数を保障する」「能力別により拮抗したゲームを増やす」ことを達成する

リーグ戦・育成センター実施報告・実施計画　提出スケジュール（予定

■年度末に、次年度 実施計画書・実施要項 を提出する　＜期限：2月末日＞

■年度終了後に、前年度 実施報告書 を提出する　＜期限：4月末日＞

	リーグ戦	育成センター
10 月	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）
12 月		
2 月	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）
3 月		次年度育成センター実施伝達講習会（予定）
4 月	前年度実施報告書提出（期限：末日）	前年度実施報告書提出（期限：末日）
10 月	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）
12 月		
2 月	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）
3 月		次年度育成センター実施伝達講習会（予定）
4 月	前年度実施報告書提出（期限：末日）	前年度実施報告書提出（期限：末日）

3. 育成センター

■目的

・個の育成 「選手作り」

・成長スピードを早める

・勝利至上の戦術指導ではなく、習熟度別、段階別を考慮した指導を行う

・指導者は育成世代の指導内容への理解を深める

・育成世代コーチングを実践する

・タレントスカウティングの力を向上させる

■タレントスカウティング（選手発掘）

・フィジカルテスト (スプリント・ジャンプ力等バスケットボール特性)

・バスケットボールスキルテスト (シューティング、パッシング、ドリブル、フットワーク等)

・バスケットボールIQ (戦術を指導し、表現力・理解力を見る)

・メンタル特性 (リーダーシップ、積極性、闘争心、ディフェンスへの意識等)

育成センター機能
育成事業と代表活動の連携

2018/6/4 (10/29修正案)

将来構想ＷＧ(育成センター)

育成センターの機能・発掘の流れ

育成センター機能

発掘

- 早熟と晩熟、技術と経験年数、将来予測身長、運動能力、運動学習能力を考慮。
- 都道府県からナショナルトライアウトに推薦できる選手を見つける(責任者は都道府県ユースコーチ及びユースダイレクター)
- 県からの推薦を受けてユースダイレクター(仮称)によるチェックがあり、最終選考会議へ推薦
- ナショナルトライアウトは原則60名以内で実施する

育成

- 「選手を作る」
- LTAD育成方針に沿い、4つのフェーズのどこに位置するか考慮
- 各年代毎の特徴を考慮
- 強化モデル、一貫指導を考慮
- 育成センター指導内容を参考に
- 育成コーチングの実践
- 習熟度別指導を実践

指導者教育

- LTADの理解を深める
- バスケットボール構造、練習計画をより深く学ぶ
- 指導実践を通じて育成コーチング(HOW)、習熟度別指導内容(WHAT)を検討する機会
- 関わる指導者全体で何が最善かを検討する機会
- 育成年代のフィロソフィ、トレーニング、コーチングスキル、保護者対応などを学ぶ

普及

- できる限り県・地区・市町村レベルに浸透させる
- 選考されることでのステイタス
- 保護者教育

U13/U14/U15における選手発掘の流れ（2019以降）

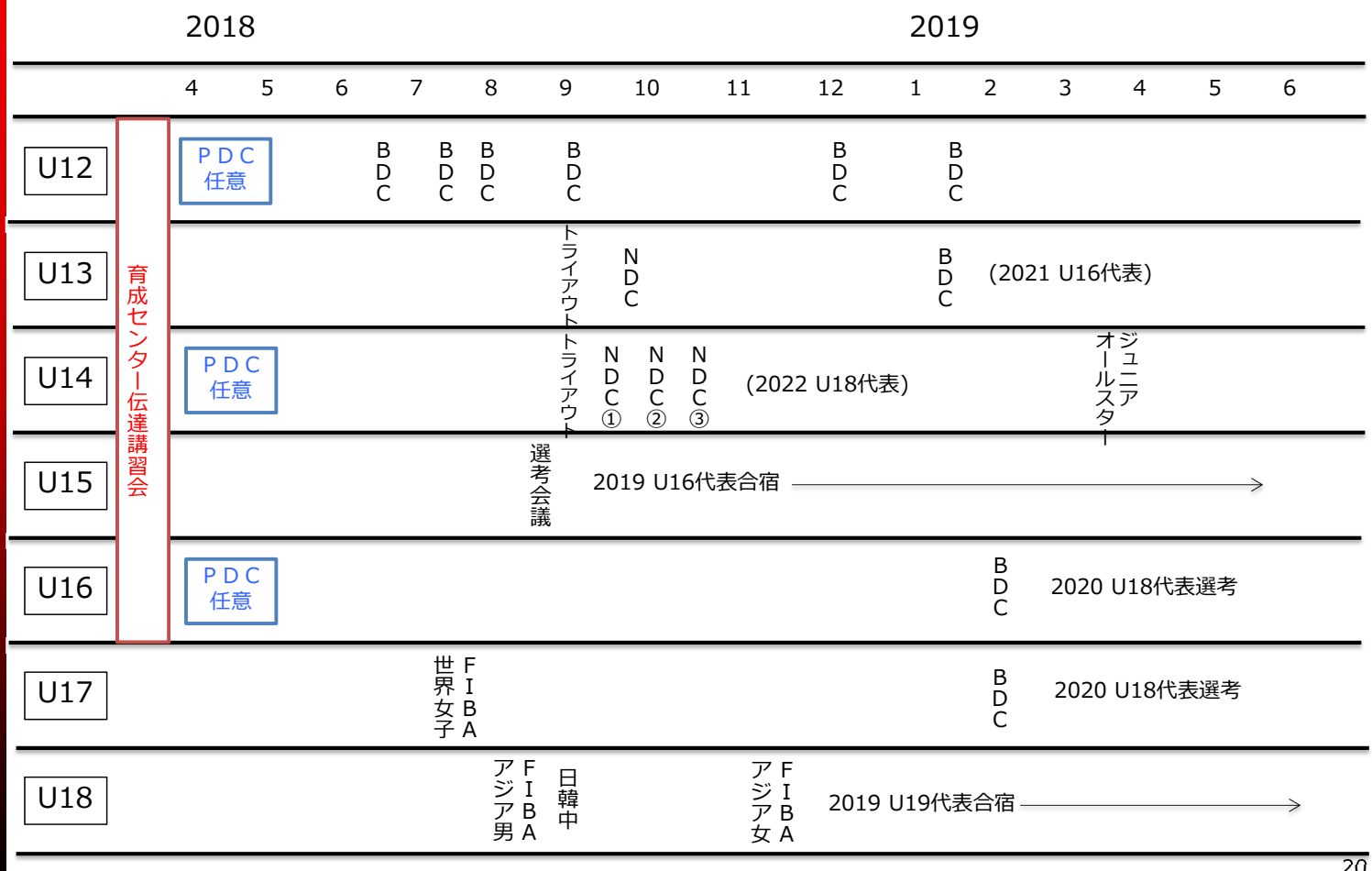
県からの推薦 → ＊1 ユースダイレクターチェック → 最終選考会議 → トライアウト実施 → NDC

60名以内　30名以内

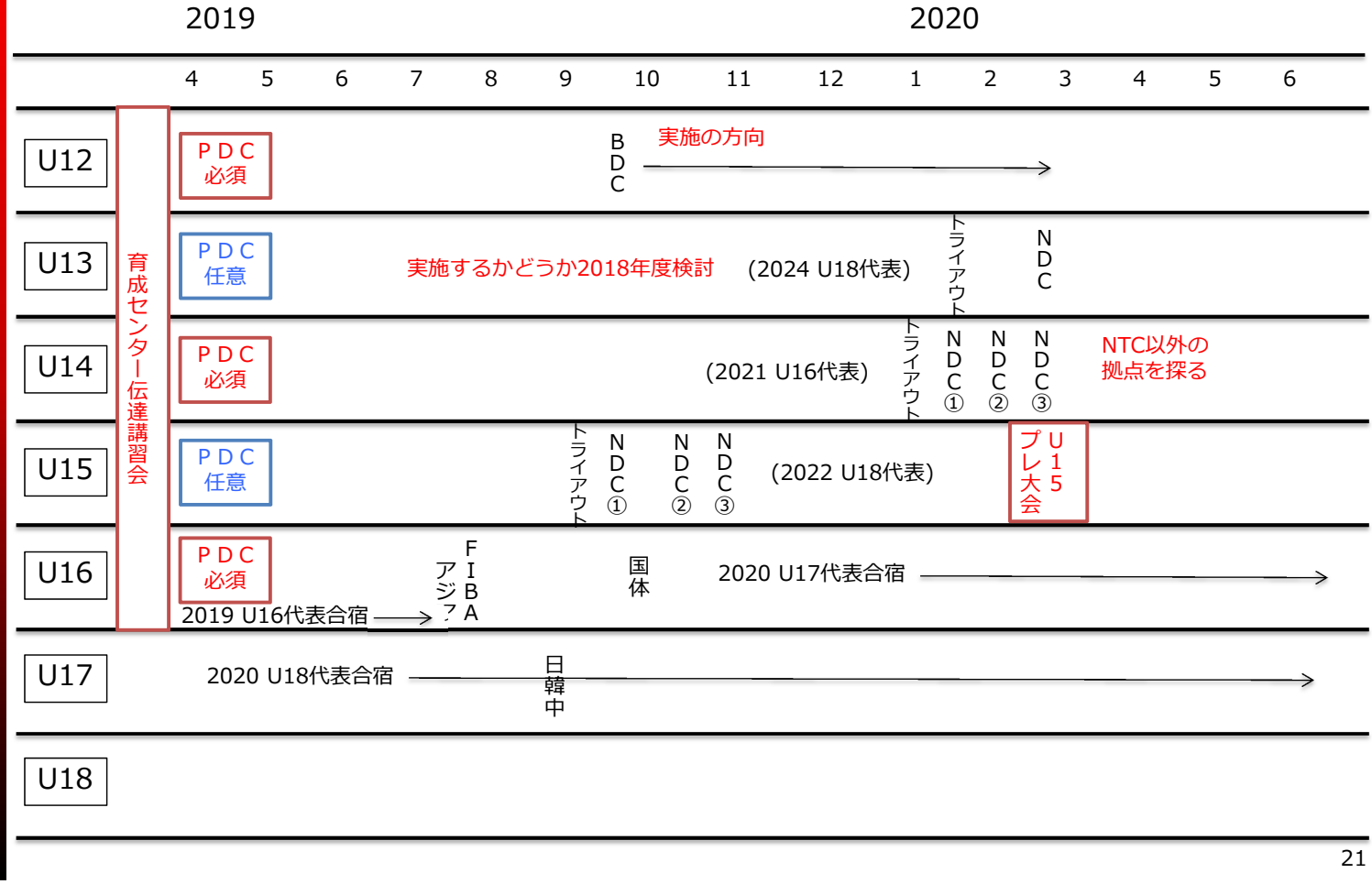
NDCにはこの道の他、強化コーチの推薦による道もある。

＊1　ユースダイレクターは新規設置を検討中。
役割は都道府県にとどまらず指定されたエリアの選手の発掘、指導内容の伝達、組織整備のチェック等。
発掘において選手選考方針の下、都道府県・ブロック格差を調整する。
2018年度はブロックユース育成コーチがブロック内選考責任者。

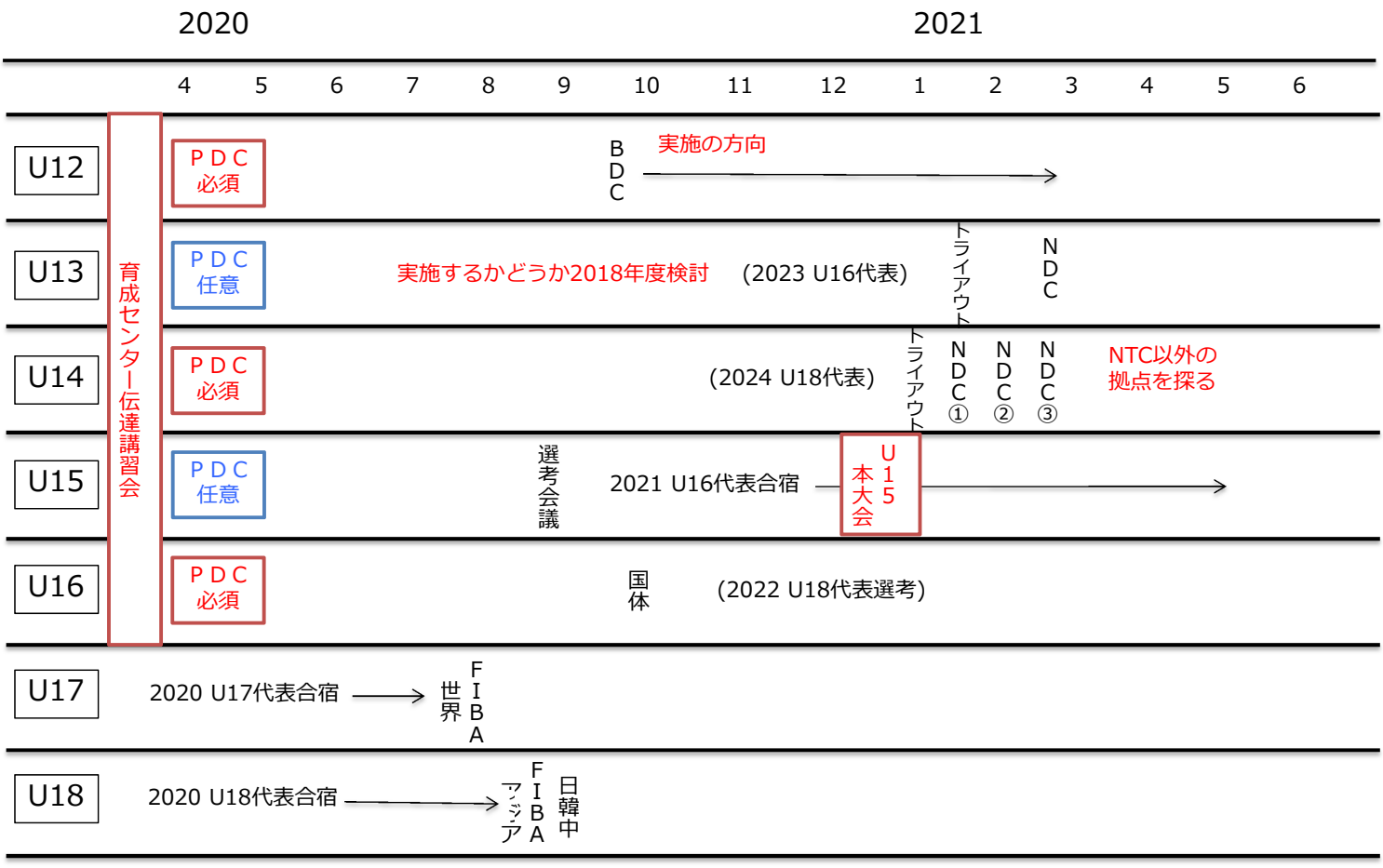
育成センター事業 → 代表活動（2018：FIBA U18Asia U17World）



育成センター事業 → 代表活動（2019：FIBA U16Asia U19World）



育成センター事業 → 代表活動（2020：FIBA U18Asia U17World）



バスケットボールで日本を元気にします！

育成センター事業の将来像

2018/5/22（10/29修正）

ユース育成部会 資料

これまでの育成事業（エンデバー事業）の検証

育成においては以下の4つの機能が必要

発掘　育成　指導者教育　普及

- 2002年よりエンデバー事業設置
  U12/U13/U18ブロックエンデバー
  U14/U15/U18トップエンデバー
- 2016年よりナショナル育成キャンプ設置
  U18は強化代表へ移行、U12/U13/U14/U15
  （U12は2018年度より休止）

発掘の問題点

人数多：力のない選手も選出されている（普及との混在）＝経費大
推薦枠：力のある選手の取りこぼし＋力のない選手の選出
時間少：1泊2日で伝達と発掘の両方を行うのは難しい
方法論：中学世代男子では早熟発掘が多く将来に繋がりにくい

育成の問題点

継続性：継続的な刺激が必要だがブロックエンデバーは年1回の事業
実施度：都道府県育成はJrオールスター、国体強化。県による温度差。
目的異：Jrオールスター・国体準備で行うとチーム強化が強調される傾向

指導者教育（伝達）の問題点

時間少：年1回のブロックエンデバーで伝えられることは限定的（約4時間）
指針要：育成年代に何が必要かの指針が全体像として不足
周知法：指導内容資料が関係者で止まりがちで多くの指導者に届きにくい

普及の問題点

県から選抜されることのステイタスのプラス・マイナス
バスケット界へ選手を取り込むことに貢献できているか？

解決策提案の前提条件

資源（資金・人）は限りがある
限りある資源を効果のあるところに集中的に投下して成果を上げなければならない

育成における成果とは？

1．選手が将来大きく成長するための土台を作ること
2．選手がバスケットボールをすることを楽しいと思えること
3．将来の代表が世界基準で戦えるようになること
4．日本のバスケットボール界が活性化していること
5．バスケットボールに関わる方々が幸せに元気でいられること
6．多くの選手がバスケットボールを行う様になること

成果を上げるための事業を実行することを前提に提案

育成センターの将来像

2018年度よりエンデバー事業を「育成センター(Development Center)事業」と名称変更する
都道府県育成センターが育成活動の中心となる
各年代の将来有望選手候補育成をナショナル育成センターにて実施する
2019年度以降、経費を都道府県DC（D-fund）、ナショナルDCにより多く充当する(ブロックDCをなくす)

発掘方法論

複数回の都道府県育成センター活動により、数回のトライアウトを経てより有望な選手の発掘
都道府県内の有望選手の情報収集をより密に行う
早熟発掘と晩熟発掘を理解し、男女の差異に留意しながら選手を選出するこれまでと異なる方法論
都道府県DC→ブロックDC

育成方法論

目標年10回、月1回の複数回実施により、選手に刺激を与え、意識を持たせる
チーム作りではなく、選手作りを目標とする育成コーチングの周知徹底
オールラウンダー育成＋特化した能力のより向上を目指すコーチング

指導者教育（伝達）方法論

「どのように指導すべきか」を理解してもらうための育成コーチング資料準備
「何を指導すべきか」育成世代に必要な指導内容を理解してもらうための習熟度別資料準備
都道府県育成センター活動を通じて指導者間で何が必要となるのかを検討する機会を持つ

普及方法論

他県交流戦を各都道府県裁量で実施していただくことを推奨
地区育成センターの実施によってより多くの候補選手に目指すものを伝えていく

各年代における育成センター事業

育成センター	U12/U11		U14/U13		U16/U15	
	2018	2019-	2018	2019-	2018	2019-
都道府県	○	◎U12	○	◎U14	○	◎U16
ブロック	◎	◎U12	◎U13	×	◎U16/U17	×
ナショナル	×	×	◎U13/U14	◎U14 △U13	×U16代表	◎U15

◎：重点実施　○：推奨　△：検討中　×：実施せず

ブロック事業の考え方・U12/U13発掘事業

1. 発掘機能を再検証した結果、ナショナルに繋がる選手はもっとシビアに選考しなければならない。都道府県育成センターにてナショナルに推薦できる選手基準にて厳格に判定し、ブロック育成センターを実施しなくとも選考する方法論とする。
2. ブロック育成センターの経費を都道府県育成センター（D-fundにて47都道府県に補助）、及びナショナル育成センターに充てる。
3. ブロック育成センター（旧ブロックエンデバー）が担っていた「伝達」の役割は直接都道府県育成センターにて行う。「ブロック間交流」の役割は各都道府県育成センターの延長として、都道府県裁量により別途機会を設けて補っていただく。
4. U12・U13はナショナル育成センターに選抜するには身長が未発達の時期であり、代表候補確定が難しいことから、都道府県発掘にて有望選手をリストアップし、U13・U14都道府県育成へ情報を伝達することを目標とする。

将来像

都道府県育成センター

発掘・育成・指導者教育を都道府県の裁量にて活性化させていく。
JBAは指導内容・指導者教育・発掘方法論・育成方法論などに関する情報提供を積極的に行なって支援する。
他県との交流(ブロック内交流戦実施等)を都道府県育成センターの一環(延長)として位置づける。

ナショナル育成センター

U14/U15ナショナル育成センターはトップ選手の目標
(U13ナショナル育成センターは2019年度検討中)
U14以上での海外交流を検討
U16・U18・A代表への選出確率を高める(経験値を代表に活かす)

ブロック育成センター

2019年度U12ブロック育成センターを実施
都道府県育成センターをより活性化させるため
指導者教育をより強固にするために

4. 育成世代コーチング

暴力は犯罪・暴言は心への暴力

■暴力は子どもに対してといえど罪になる意識、暴言は子どもの心に傷を負わせることの自覚

・指導者が意識をすることが大切

パワハラの定義

■これまでの指導の当たり前を変える

・「パワーハラスメント」となる定義を知っておく … 時代により価値観は変わる。適応が必要

JBAの対応策

■懲罰規定の整備 … JBA基本規程、倫理規程の整備 → 都道府県協会での適用

・不適切な指導者に対しての処罰規定の整備

JBAの予防策

■指導者養成部会の取り組み

・インテグリティ教育

・指導者講習会・ディベロッパー講習会で実施

将来を見据えた指導

※指導者教育が全てにおいて重要

■育成コーチングの目的/考え方
・選手を作る
・選手を育てる
・可能性を信じてプレータイムを与える

■マンツーマン推進
・将来成長する土台を作るためにマンツーマンを学ばせる
・勝利至上主義に指導者が引きずられない

■リーグ戦
・普及的観点で試合環境を整える：補欠文化改善 (複数チーム登録)
・拮抗したゲーム環境
・長期リーグ戦で日常にゲームがあること (試合～練習～試合)

■育成センター
・個の育成を目指す
・成長スピードを高める
・勝利を得るための戦術指導ではなく学ぶべき指導内容を習得させる
・指導者も習熟度別内容を学ぶ
・タレントスカウティングの考え方を実践：選手を見抜く力を養う

育成世代コーチングの対象とする領域

■育成コーチングの対象

・コーチングフィロソフィ

・年代別トレーニング＝動きの獲得、能力別トレーニング、技術戦術トレーニング

・習熟度別指導内容＝易→難

・練習方法論＝認知判断、ドリル、強度と量

・練習計画論＝ピーキング、回復理論、PDCA、1回・週・月

・コーチングテクニック＝模範、映像活用、質問、オートクライン、コーチングスタイル、話し方、言葉、強度調節

・タレントスカウティング＝選手を構成する要素の理解、早熟、PHV

・人格形成＝フェアプレー、自立、協調、感謝

・保護者対応＝育成コーチングフィロソフィの理解、関わり方

育成コーチング

■コーチングフィロソフィ

・何のためにコーチをするのか
　→　選手の成長を促すため○　　自らの欲を満足させるため×
・「将来を見据えた考え方」により、選手の成長の土台を構築する
・「個の育成」「選手づくり」をする年代
・「バスケットボールを通じて良き人材を育てる」
　→　フェアプレー精神、全力を尽くす姿勢、自立、協調、感謝
・勝敗の考え方
　→　勝利を目指しながら育成する　競い合いは敬意と品格を持って、やるべきことをやりつつ勝利を目指す
　　失敗から学ぶ　負けを受け止め次へ繋げる考え方
・「自立できる人材・選手」を作る
　→　自己判断をさせる、選手にも責任を持たせる、言われたこと以上をやる選手をつくる

■U12世代におけるトレーニング

・動きの基礎トレーニング (姿勢・バランスなど)
・各種運動能力を高めるトレーニング (持久力、筋力、スピード、アジリティ、クイックネス、ジャンプ、柔軟性、コーディネーション)
・技術戦術トレーニング

育成コーチング

■練習方法論

・認知判断を求める
・指示する際の方法論を意識する
・考えずにできる練習を少なくする＝考えながら行う練習をする
・練習課題の難易度のコントロール

■練習計画論

・練習量と強度のコントロール
・ピリオダイゼーション理論＝ピーキング(強度と量の調整)、回復理論を知る
・PDCAの考え方(試合～練習～試合)
・1回の練習＝待ち時間を短く、ボールをできる限り持って行う、使えるスペースを有効活用
・週の練習、1ヶ月の練習＝身につけさせるべき内容を整理しておく

■コーチングテクニック

・良き模範
・映像の活用、マネをさせる
・フィードバックする、指導者が評価しながら質の高いものへ変えていく、求める基準との違い
・質問を使う
・教えすぎない
・話し方、言葉を選びながら
・自尊心を大切にする、価値ある人間だと思わせる、できるという感情が大切、肯定的な指導

■ゲームモデルの段階

1）1対１重視：突破を図ることを狙う段階（ペイントアタックの意識、突破技術を磨く）
- ドライブ＆キックが必要 → スペーシングを指導

2）1対1重視：パス＆カットで人を動かし、ボールを動かすことで突破を図る段階
- ディフェンスが強くなるので、動いてズレを生み出す
- ボールをつなぐスポット、タイミングの指導

3）1対1、2対2：パス＆カットの中からオフボールスクリーンを利用する段階
- スクリナーのセット技術の指導
- スクリーンを使うユーザーの技術の指導
- スクリーンを使う必要がなければスペーシングを取ることを考えた方がよい

4）1対1，2対2，3対3：相手のディフェンス力が高まり、自力で突破できない時にオンボールスクリーンを使って突破を図る段階
- オンボールスクリーン・ボールマンの技術
- オンボールスクリーン・スクリナーの技術
- オンボールスクリーン・ヘルプサイドのスペーシング及びプレー

課題 **① よい人材をどのようにして発掘するかの視点**

■早熟と晩熟の理解
早期専門化の弊害：将来成功しにくい、障害・バーンアウトの危険性
バスケットボールは晩熟型スポーツ

■タレント発掘の視点
運動能力
経験年数と技術レベル
最終予測身長（両親身長や環境要因による、データ収集による予測）
運動学習能力（コーディネーション能力）
メンタル特性（リーダーシップ、闘争心、積極性、ディフェンスへの意識）

② 現状のデータより

■2018年度U13/U14ナショナル育成センターより
・身長データよりPHVAを算出したところ、男女共に約1年の早期成熟が見られた
＝ナショナル育成センターに推薦されてくる選手は成長が早く、そのために選ばれている可能性がある。
→選手のパフォーマンスが早熟によるものか、高い運動能力を持っているものかを見極める必要がある

マンツーマン推進　今後の方向性　目的の再認識

■ 全ての選手に習得させたい土台

1）　オンボールオフェンス　　：　1対1での突破力

2）　オンボールディフェンス　：　1対1で守る力

3）　オフボールオフェンス　　：　スペーシング、動きのタイミング（合わせ）

4）　オフボールディフェンス　：　ビジョン（ボールとマーク）、ポジショニング、予測力

※オンボール：ボールを持っている状態
※オフボール：ボールを持っていない状態

マンツーマン推進　今後の方向性　フェアプレー精神の浸透

■フェアプレー精神

→　ルールを守る　　＝　決めたことを守る
→　審判に従う　　＝　コミッショナーに従う
→　相手をリスペクトする　＝　ルールの中で全力を尽くす相手を尊重する

※ルールの隙間を狙うのではなく、目的を理解し、選手にフェアプレー精神を伝えよう

■指導者もフェアプレー精神、「将来を見据えた指導」

「マンツーマンディフェンスを使って競い合う」

「ゾーンをするのは育成世代のコンセプトから外れたものである。」
「育成世代の勝利/成功は、勝敗だけでなく、将来の成長スピードを高める土台を身につけることでもある」

バスケットボール界が偉大な組織に成長するために

都道府県U12/U15/U18カテゴリー部会の
果たすべき役割は大きい

■ストックデールの逆説

・現実から決して目をそらすことなく、厳しい現実を現実として受け止める
・最後には必ず勝つとの確信を持ち続け、厳しい現実はあっても、力を持つようになる目標を追求する

■大切にすべきハリネズミの概念（※ハリネズミ＝突き詰めた単純化）
＝育成世代コーチングフィロソフィ 「将来を見据えた考え方」「プレイヤーズファースト」

・個を育成する 「選手作り」
・16歳までに個人基礎・プレー基礎を理解させる 「習熟度別指導内容」
・世界基準で教える 「細部へのこだわり」「強度」「ファンダメンタルの徹底」
・チームスポーツとしてのチーム精神を理解させる
・LTADの考え方
・人格形成を重要視する 「フェアプレー」「自立」「強調」「感謝」
・判断の習慣

■弾み車の回転

・準備段階から突破段階へ移行するパターン
・巨大で重い弾み車を回転させるのに似て、当初はわずかに前進させるだけでも並大抵ではない。
努力が必要だが、長期に渡り、一貫性を持たせて一つの方向に押し続けていれば
弾み車に勢いがつくように、やがて突破段階に入る

偉大な組織への変革　（ビジョナリーカンパニー②飛躍の法則 p.292）

■良い組織が偉大な組織となるために

1．全ては第五水準の指導者から始まる　＝都道府県部会長の皆さんにお願いしたい

考え抜かれた静かな過程によって弾み車を押し続け、誰の目にも明らかな「実績」を生み出すことに関心がある

2．適切な人達をバスに乗せる　＝誰を役職につけて、誰に手伝ってもらうか

不適切な人達をバスから降ろし、適切な人達が適切な座席に座るようにする

3．ストックデールの逆説　＝必ずぶつかる困難にどう対応するか、どう考えるか

正しい方向に押し続けていれば，いずれ突破段階に入る
現実を直視すれば弾み車を回転させるために取るべき手段を理解できる
最後には必ず勝てるという確信があれば、何ヶ月はおろか何年にもかかる準備段階を切り抜けられる

4．ハリネズミの概念の3つの円　＝育成世代に大切なことは何か？

深く理解するようになり、理解に基づく方向に弾み車を押し続けていれば、やがて勢いがついて
突破段階に入り、促進剤によって勢いを加速できる。
促進剤とは、関連する技術の応用。

5．正しい決定を積み重ねていく規律　＝育成世代に大切なことを守りつつ、決定していく

ハリネズミの概念に基づく、正しい決定を行う規律ある行動が不可欠
規律ある人材による規律ある考えが不可欠

（ビジョナリーカンパニー②飛躍の法則 p.292より）

バスケットボールで日本を元気にします！